

Rio

今月は…三河湾

CONTENTS

- アマモ場の役割について—その最近の状況
- 海からのメッセージ
- 今月の一枚
- 三河湾を想う
- 警告! カワヒバリガイ

アマモ場の役割について——その最近の状況 鈴木輝明

アマモ (*Zostera marina* L.)は温帯から亜寒帯に広く分布する海草で、かつては日本の主要な内湾でアマモ場 (seagrass bed) と呼ばれる広大な群落を形成していましたが、現在は大きく衰退しています。三河湾でも1955年頃までは沿岸のいたるところにアマモ場があり、1959年の調査では面積は約8,437haと推定されていましたが、1970年以降はその大部分が消失してしまい、2001年には312haに激減しました。三河湾での消失の原因は埋め立てと透明度の低下によるものと推測されています。

アマモ場が魚類の産卵や幼稚子の育成の場であることは比較的古くから知られていましたが、面積が激減した最近の状況について、三河湾沿岸域の3地区（蒲郡市竹島地先、同市三谷町地先、一色町地先）に存在するアマモ場の内と外に同じ距離の観測ラインを設けビーム式藻曳網を曳網し、魚類を採集した結果があります。写真は調査を行った蒲郡市三谷町地先に残っているアマモ場ですが、矢作川河口域の一色干潟周辺にはこのようなアマモ場が他の海域に比べ比較的多く残っています。調査はアマモの最大繁茂期にあたる2002年、2003年の春季に愛知県水産試験場によって行なわれました。魚類の観測結果を要約すると、

- ① アマモ場内・外の1回あたりの平均採集量を比較すると、アマモ場内はアマモ場外の6.6倍。
- ② 地区ごとの採集量の差はアマモの植生被度の差に対応し、植生被度が高いほど採集量が大きい。
- ③ 出現種類数はアマモ場内で14種、アマモ場外が7種で、アマモ場内が2倍。
- ④ 出現種の中で最も優占した種はメバルで、重量比率で62%。
- ⑤ 水産有用種として重要なマダイ稚魚、トラフグ稚魚が、水底質環境が悪化している三河湾奥のアマ

モ場に出現。

といった内容です。また、伊勢湾東部に位置するアマモ場では1993年から1996年のアマモ繁茂期において、魚類の胃内容物に出現する餌料生物がアマモ群落内にどの程度存在しているのかを調べた結果もあります。アマモ群落内はその周辺に比べ約11倍の44g/m²（乾燥重量）という高密度の餌料生物が生息していることがこの調査から明らかにされました。面積が少なくなったとはいえ、依然としてアマモ場が重要な生物生産の場であることはこれらの結果からも明白です。アマモ場は豊富な餌料生物を背景に、多くの魚類幼稚子が生息できる海の保育園といっても良いでしょう。

また近年、アマモ場には赤潮や貧酸素水塊の原因となる窒素やリンを取り除く高い水質浄化機能があることも明らかになってきました。機会があればご紹介したいと思います。あたりまえにあったものが無くなってはじめてその重要性に気づくことは世の常ですが、アマモ場はまさにその典型的な例と言えましょう。

（すずき てるあき、

愛知県水産試験場 漁業生産研究所長）



三谷町地先のアマモ場 平成14年5月撮影 約12ha

海からのメッセージ

倉地 格

愛知県渥美郡渥美町の西の浜でのゴミ拾い活動は、まず子供たちのあいさつからスタートする。

「今日もよろしくお願いします。」

元気のいい掛け声と共に浜辺一面に散らばったゴミと亀の子隊員との戦いが始まる。

1998年、渥美町内の亀山小学校の教諭だった鈴木吉春先生は、「地元を知ろう」と4年生の児童を連れて西の浜を訪れた。浜には巨大な流木や、竹、刈草などの自然ゴミの他に、ペットボトル、空き缶、タイヤ、スチロール箱、看板などの人工ゴミがおびただしく散乱していた。これを見た児童たちは、「西の浜はゴミ箱じゃないんだ」、「最終処分場じゃないんだ」と怒りの声をあげ、誰からともなくゴミを拾い始め、亀の子隊が誕生した。

メディアで亀の子隊の活動を知り、協力参加して今年で3年となるが、現地で散乱するゴミを見ると、海

から発生するものは極めて少なく、流れ着いたものが殆どだ。山や、流域市町村のゴミが支流を伝い、本流を流れて海へ入り、季節風に乗って西の浜に漂着する。

日常生活でのエコライフの大切さと共に、川での美化活動は川だけではなく、山や海との連携が重要であり、過去14年の活動が如何に自己満足のものであったかを痛感した。

「海は、私たちが生きていくために必要な多くのものを与えてくれました。そんな海に、私たちの祖先は感謝して生きてきたのです。ところがいつの間にか、海への感謝を忘れて、台所からは油が流れ、要らなくなったものをゴミとして平気で捨てていました。海はすべての命の源です。21世紀に生きる私たちは、きれいな海を守っていきたいと思います。」

(亀の子隊メッセージより抜粋)



指導する鈴木先生は、「悩みごとはいろいろあるが、とにかく楽しいです。参加してくれる子供たちに出会ったことは、大きな財産です。この活動を続けることは、自分の生涯で果たすべき天命かもしれません」と語る。

亀の子隊の子供たちに、大人になってもゴミを拾い続けて欲しいとは言わない。しかし、この貴重なボランティア体験を生かして、「決してゴミを捨てない大人」になってくれると確信している。

(くらち いたる、アド清流愛護会 会長)

ゾウムシとキカラスウリ
一九九九年九月二十五日
豊田市平井町
田中 蕃 撮影



今月の一枚

三河湾を想う

吉鶴靖則

私がアユの調査員になるまでの三河湾は、いつも鳥や植物を介して岸边といった縁辺部を眺める場所だった。矢作川河口の周囲に広がる塩田跡や埋立地は、かつてシギやチドリといった渡り鳥（写真1）の宝庫で珍鳥も数多く記録され、岸边はカモメを楽しむことができる良い探鳥地であった。また少ないながらも海岸でしか見られない植物（写真2・3）を楽しむことができる場所が、三河湾には残されている。

ただ三河湾の縁辺部は、植物を楽しむには堤防などで岸边が破壊されているし、渡り鳥などの良好な生息地となっていた干潟などはすでに埋め立てられ、今では見る影もない状況となっている。アユの調査に関わる前に感じていた三河湾は、すでに瀕死の状況であった。当時からアサリなどの漁場が悪化の一途をたどっていたが、これは渡り鳥の減少と共に当然のことと考えていた。なぜなら干潟が埋められるということは、アサリにも鳥にも良好な生息地が減少するということだからである。自然の流れであれば、川から土砂が供給されてくることで干潟はまた形成され、少しずつでも改善の兆しを見ることができたかもしれない。しかし矢作川は幾つもあるダムで土砂をせき止められ、干潟や砂浜を作る堆積作用は川と海で分断されているのである。このことは一度干潟を失うと、そのままアサリなどの漁場も再生されないことを意味している。川と海が分断されているという思いは、アユの調査をすることで更に強くなった。

私が初めて経験したアユの調査は集魚灯によるものであった。魚が、エビが、様々な生物がほとんど集ま



写真1 渡り鳥の群れ シギの仲間 トウネン



写真2 砂浜海岸で見られる小さな木 ハマゴウ

ってこない海は、少年時代や学生時代に親しんでいた外洋に面した美しい海とは明らかに違い、三河湾は海の生物を楽しめる環境とは感じられなかった。その思いを強くしたのは湾内の底質調査で、ヘドロの臭いをまともに嗅いだとき、生物がいない元凶を知った気がした。また砂浜の表面は貝殻だらけで収益のである海産物のごくわずかであり、むしろ取り尽くされている気がするほどであった。調査船となった漁船の船頭さんのぼやき節を聞かずとも、三河湾の漁業の苦しみを見た思いがした。アユのような川と海を行き来する魚の豊漁を目指すには、稚魚が過ごす三河湾の環境改善がなされない限り、無理ではないかと思えた。矢作川のアユは海で幼い命を絶たれてしまいかねないことを感じ、絶望感に似た気持ちが調査を行うほどに積み重ねられた。

幸いなことに私が調査を始めてからはアユが豊漁である。この原因の一つは生まれてまもないアユの仔魚が海に流されるときに矢作川の水量がたまたま多く、湾内でも環境の良い場所へと仔魚が流されたことだと考えられている。三河湾内にもまだ多くのアユを育てることができる場所が残されているようなのである。当初私を不安にした場所とは違い、そうした場所では様々な種類の魚や生物を楽しむことができ、一度だけはあるがクジラの仲間であるスナメリも2頭見ることが

できて、三河湾がまだ生きていることを実感した。今はこれまで得た水質や底質などの様々なデータにより、瀕死の海と命輝く海との違いは何かの解明が待たれるところである。アユの調査を通して見たほんの狭い範囲の三河湾であるが、調査結果が有効に活かされ、豊かな海を目指す手助けになることを祈ると共に、今後とも調査を継続できることを切に願う次第である。

(よしつる やすのり、矢作川天然アユ調査会 会員)



写真3 砂浜海岸の花 ネコノシタ (別名ハマグルマ)

警告！ カワヒバリガイ

白金晶子

本誌のNo.80・81号、86号で紹介しました外来種のカワヒバリガイが矢作川に凄まじい勢いで拡がっています。矢作川中流ではどの石をひっくり返しても、この貝が付着しており、ひどい時には石がカワヒバリガイで覆われているという状況も見られます。また石だけでなく川岸のヨシが水中に張りだした根

にも付着しています。河川内の水流があまり激しくない場所では、至る所カワヒバリガイだらけといった状態です。

先日、枝下用土地改良区の今井事務局長より、枝下用水でのカワヒバリガイの生息状況を写した写真を頂きました。枝下用水は矢作川中流の越戸ダムから取水し、豊田市南西部に灌漑を行っていますが、取水口から下流の約2kmの区間、写真のような状態が続いているそうです。また、以前は数mmから1cm程度の稚貝が多かったのですが、現在では写真のような2~3cmの成貝が目立つ様になりました。枝下用水の末端部はパイプの内径が75mmと細くなるため、今井さんは「このカワヒバリガイがパイプを詰まらせ、通水障害を起こすのでは」と危惧されています。

すでに日本でも淀川水系など通水障害が起こった例がありますが、有効な対応策が無く、人力で剥がしとるという方法が一般的に用いられているようです。矢作川から取水している他の施設も枝下用水と同じような状況に陥っている可能性が高いため、早急に対策を取る必要があると思います。

(しらがね あきこ、豊田市矢作川研究所 研究員)



枝下用水の水路にびっしり付着したカワヒバリガイ
2005年9月5日 寺田一弘氏 撮影

編集後記



去年、はじめて亀の子隊のボランティア活動に参加し、海のごみの多さにあ然としました。私は、矢作川の河口より50km程上流の緑豊かな山々に囲まれた町に住んでいて、「ポイ捨て、ゴミのない町を」と、環境美化活動に取り組んでいます。しかしながら、心ない人の不法投棄が後を絶たないのが現状です。そんなゴミが大量の雨などによって流され支流から矢作川、あげくは三河湾へと運ばれます。三河湾は「大きなゴミ箱じゃない！」と隊員達はいいたそうでした。三河湾のゴミ拾い活動は、ほんの短時間ではありましたが、気持ちよさといきどおりを感じました。(田)

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19
豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860
FAX 0565-34-6028
e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

